

特別審査委員賞 [高校生の部]

被災地を訪れ、多くの被災者の思いを聞く体験を通して震災以降の日本を正面から捉えたこと、また率直な意見が、審査委員の心に響きました。

NFJ 学生小説コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
私たちがすべきこと、できること、
やりたいこと
入賞作品

日本から
未来を
提案しよう



自然と仲良く暮らすために —— 知ること、考えること、伝えること

三重県立四日市高等学校 2年

伊藤 茜 いとう あかね

従姉が結婚式を挙げた。私たちは家族で招かれ、初めて花巻市を訪れた。花巻は内陸にあり、大震災の傷痕も見当たらず、穏やかな景色が広がっていた。震災の一週間後、従姉は釜石で新しい生活を始めるはずだった。住むはずだったアパートも、勤めるはずだった薬局もすべて津波に呑み込まれた。地震直後、海沿いを車で走っていた彼とは三日間連絡がとれず、遠く離れた三重県で、従姉も私たちも、次々飛び込んでくる信じられない映像に呆然とするだけだった。あれから一年半、二人はアクシデントを乗り越え、この日を迎えた。

華やかな結婚式の翌日、私たちは花巻を

離れ、気仙沼から南三陸に向けて出発した。ここから気仙沼という標識を見て、テレビで見たあの風景がいつ目の前に現れるのかと緊張した。だが意外にも、かなり海に近づくまであんな悲劇が起こったとは思えないくらい静かな様子だった。人々の生活も落ち着いてきたのか。しかしよく見ると、人の気配の消えた家、シャッターの錆びついた商店が目立つ。気仙沼漁港には観光客もいて賑やかだったが、そこ以外はまだ活気溢れる町とはほど遠かった。南三陸に入ると、海沿いに開ける平地はこれから団地の建築を待つ造成地のようだった。そこに何かがあったのか、最初から何もなかったのか、一見しただけではよ

自然と仲良く暮らすために

—— 知ること、考えること、伝えること

くわからなかった。

翌朝、震災を経験した人が語り部となって町を案内してくれるバスに乗った。車窓から見えたのは、テレビで何度も見た、津波によってさらわれた町の残骸だった。造成地のように見えた場所には、砕けた家の基礎が残り、何ごともなかったように見えた立派な建物も、破れた窓の中を風が吹きぬけていた。所々に瓦礫の山が築かれ、へしゃげた船、錆びた車の墓場もある。そこにあったはずの家も店も人々の暮らしも何もなく、ただ草だけが逞しく生きていた。ほんの少し坂を登っただけの高台には、洗濯物の干された家が点在し、生死を分けた僅かな差を実感した。この家とて無事だったわけではないだろう。瓦が落ち、窓も割れ、家財も散乱しただろう。けれど何とかこうして日常を取り戻している。大きな地震ではあったが、それだけなら復興も早かったはずだ。あの津波さえなければ。

町の商店主たちが協力して立ち上げた商店街もできている。利用者の八割は旅行者だと聞き、たった一泊の旅で、ボランティアもできずに帰る後ろめたさが少し和らいだ。海辺に建ち、屋上まで津波に曝されながら一人の犠牲も出さなかった戸倉小学校は、校舎も震災直前にできた体育館も跡形もなかった。生徒一人と先生が亡くなった戸倉中学校は高台にあった。こんなところまで津波が来たというのか。最後まで住民に避難を呼びかけ亡く

なった職員の方がいた防災センターにも立ち寄った。錆びた鉄骨だけになったセンターには、屋上にあるアンテナの途中まで波が来て、たくさんの命を奪った。外階段はぐにやりと曲がり、津波の威力を見せつけていた。

「この町の姿をカメラに収めて、たくさんの人に見てもらってください。観光に行くのは気が引ける、などと思わないでください。」

語り部さんの言葉は、これからもこの町で生きていく決意が感じられた。この先どこに住めばよいのか、仕事はあるのか、仮設住宅で不安に駆られながら小さい子どもたちを育てている若い人たちのストレスを、自身も仮設に住み、幼い子ども二人を持つ親である語り部さんが話してくれた。いつまでもひとから頂いた物資で子育てをしたくない。けれど、自分では買ってやる余裕もない。じゃあ、どうしてほしいのか、どうすべきなのかもわからないというのだ。子どもたちの遊び場は狭い仮設の中とその周辺だけだ。中高生が、休日に遊びに行く店も、夕暮れまで語り合う公園もない。こんな生活が続くと、町に対する愛着は薄れ、みんな出て行ってしまふかもしれない。元の生活に戻るためには、物理的な問題だけがクリアされてもだめだ。元の場所、元の仲間と、元の仕事があってこそ叶うことなのだ。

福島はこの問題を解決できるのだろうか。壊れた建物を撤去し更地にすることも、行方

自然と仲良く暮らすために

—— 知ること、考えること、伝えること

不明の人を探しに行くこともできない。ボランティアも観光客もなく、そこで今何が起きているのかを知る手だてもない。そしてこの状況がいつまで続くのかさえないからなのだ。地震だけなら、いや津波だけならまだ良かった。放射能さえなければ、ゆっくりとでも立ち直れたのに。元の場所での生活を希望する人が減少したという。戻りたいと言えば戻れるのか。命の保証もない土地で子育てをしたいという人がどれだけいるというのか。国は、避難区域の人がみんな諦めるまで、じっと待っているだけなのだろうか。

これだけの経験をしてもお、私たちは原子力発電に依存しなければいけないのだろうか。原発先進国のフランスでさえ、いち早くエネルギー政策の見直しを始めたという。私は原発には反対だ。けれど声高に反対を唱えられるほど、国のエネルギー事情を理解しているわけではない。本当に必要な電力はどれくらいなのか、足りない分は我慢では補えないのか。安全な再生可能エネルギーを開発することに、なぜもっと積極的になれないのか。知らないことばかりだ。フランスの原発からすぐ近くにあるドイツの小さな町で、住民がお金を出し合って再生可能エネルギーの活用に取り組んでいるという話を聞いた。自分たちの手で自分たちの生活を守るという考えは、今の日本に欠けているのかもしれない。豊かな暮らしは国に頼るだけでなく、現状を批判するだけでなく、自分たちで考えることか

ら始まるのだと思う。

私の住む町は、かつて公害の町と呼ばれていた。多くの犠牲を払い、今私たちは普通の生活ができているが、今でも工業都市としてコンビナートに依存している部分が大きい。いずれ来るであろう南海トラフ地震の際には、この地域にも五メートル程度の津波が押し寄せ、コンビナートのある埋立地は液状化すると予測される。私の家も水と火に包まれるかもしれない。私は安全に暮らす方法、自然とうまく折り合いをつける方法を知りたい。地熱発電や風力発電についてもっと知りたい。知ることがたくさん人の命を救うことに繋がるのだと思う。大学では地球工学、環境工学を学びたい。立ち向かうには大きすぎる自然とも、もっと仲良くする方法があるはずだ。災害から命を守ること、自然の恵みを利用して暮らしを豊かにすること、私に何ができるのかはわからない。けれど、正しい知識を身に付けて、それをできるだけたくさんの人に伝えたいと思う。『津波てんでんこ』の教訓のように、不幸な出来事から学ぶことはたくさんある。経験や知識を前に向けての力に換え、もっと先の人たちに伝えていくことが私たちの使命だと思う。震災を機に見つけたこの目標を、私は必ず達成したい。